

「故郷」はどこだ

「腰にさしてゐるイモフライ ぼうしをかぶれば佐野ラーメン」。佐野市のゆるキャラ「さのまる」のキャラクターソング「さのまる音頭」はこう始まる。知名度不足に悩むゆるキャラも多い中、さのまるは市の内外共に知名度も上々、さのまるに会うバスツアーが企画されるなど、県内におけるゆるキャラビジネスの成功例とっていいだろう。

しかし、イモフライもラーメンも歴史をたどれば旧佐野市（現佐野市佐野地区）で働いた女工のおやつや「夜食」にいきつく。さのまるは3市町の合併時に作られたゆるキャラだが、そこに吸収された2つの町の影は見られない。

変わったのは佐野市になった2つの町のほうだった。私の住む旧葛生町は石炭工業で栄えたまちで、地元の名産といえば「そば」。とっくの昔にいないと分かった原人が地域の顔だった。決して格好イイまちではなかったけれど、「くずう」は私の故郷だったのだ。しかし合併後、おそうぎの1つだったイモフライをはじめ、佐野や田沼の商品が地元のまちの駅に「故郷」の味として並ぶ。

「故郷」とは「地元」とは「地域」とは、こんなに簡単に変わってしまう。

私のすぐ下の世代は自分たちが「葛生町民」だったことすら覚えていないだろう。彼らは物心ついた時から「佐野市民」で、ラーメンもイモフライも「故郷」の味なのだ。

「愛郷心」とは、そもそも「故郷」とは何なのか。

「福島」は「フクシマ」ではない

先日、私はインターネットである記事を見た。それは、「福島」と聞くと「フクシマ」と変換されてしまうというものだった。これは、3.11.の原発事故による負のイメージから、「福島」は原発事故のあった「フクシマ」と無意識に変換されるということだった。これを見て、私は憤りを感じた。

今後、「福島」はずっと「フクシマ」であり続けるのか。私は地元である福島が好きで、誰よりも愛している自信がある。だからこそ、これを見たときに衝撃を受けた。大学に入ってから、地方創生に関する本を読んだ。そこで、初めて消滅可能性都市について学んだのだが、福島はその予測の対象外であった。度々授業でも話題に出て消滅可能性都市について講義があるが、そもそもそこに福島の統計はないため、いつもどこか上の空になってしまっている。もちろん、事情は理解しているつもりだが。

同様に、放射線によって汚染された物質の置き場をめぐる議論もある。まるで、汚染された「フクシマ」を押しつけ合っているように感じられ、複雑な心境だ。3.11.後すぐは、福島県外に車で行くと、福島ナンバーだからといってスプレーで汚されたという話を身近によく聞いていた。

それに比べれば、今は大分良い状況になっているという。それでも、人々の頭の中で、「福

島」と聞くときっと「フクシマ」と変換されてしまうだろう。私は将来地元に戻り、何かしらの形で地域に貢献したいと思っている。どんな形であれ、「福島」は「福島」であり、素晴らしい場所であるという PR のための努力は怠らないだろう。「福島」は私の自慢のふるさとだと叫び続ける。

言葉のチカラで地域おこし

あれは何だろうか。私が週末にサークルで地域交流で訪れるある集落でゴミ袋を捨てに行ったときに見つけたときの出来事である。

宇都宮ならば、ゴミは青いネットにかぶせられ道に並べられている。だが、その集落はちがった。お家のような形をした小さな小屋があり、そこには、「護美の駅」という看板があった。現地の人に聞いてみると、「ごみを道端に捨てることなく自然を守るためにもみんなで美しさを護(まも)ろう！」という思いを込めて命名したのだという。たしかに、集落を歩いていると、ゴミ1つ落ちていなかった。

私はこの「護美の駅」の言葉を見て、言葉のもつチカラに感動した。ちょっとした工夫をこらすことで、汚くてくさいゴミ捨て場であるはずなのに、なぜか素敵な場所に感じるのである。

現在、あちこちの市町村でゴミの問題などの課題があるが、財政困難でお金を費やすことができず悩んでいる地域もある。「言葉のチカラ」を用いることでお金のかからない何かいい解決策を見い出せるのではないか。地域をデザインすることの1つが言葉のチカラなのではないか、と思い、言葉を大切にしながら日常の生活に工夫をこらしながら彩りをつけていきたいと思った。

廃れゆく地元 ー私の寂しさー

私の出身は福島県の奥会津にある三島町という所である。人口は1600人を切り、小学生はわずか34人しかおらず、人通りは少ない。しかし昔からこうであったわけではない。ダム建設や国鉄只見線の工事の盛んだった昭和25年には人口がなんと8000人弱いた。私の覚えているところでも、保育所の頃は人が多かった。秋の伝統行事である「仮装盆踊り大会」には多くの町民が訪れ、人混みの中、兄を見失わないようにするので精一杯だったことを思い出す。父の子供時代はもっと人口が多かったため、何十にも輪を作って踊ったそう。しかし現在は、出店も減り1つの輪をつくって踊ることさえ難しい。

廃れゆく地元に戻省するたびに私は寂しさを感じる。帰省の電車の窓から見える地元の景色になつかしむ一方、どんどん変わっていく地元とうまく表現出来ないもどかしさを感じ

じ、何とかしなくてはいけないという思いに駆られる。そのたびに大学卒業後地元に戻るのか、都市部で暮らすのか自問自答してみるが、答えはいつこうに出ず、ただ地元への寂しさばかりがつのるのであった。

回覧板が救った命

「本当に良かった」。回覧板が入った袋をにぎりしめた私は、心からこう思ったのである。あれは2年前の夏であった。母に回覧板を次のおじいさんに渡すよう言われ、かんかんと太陽が照りつける中、私は家から200メートル先のおじいさんの家に向かった。

その時の回覧板の内容は、「夏期ボーリング大会のお知らせ」であった。「あのおじいさんが行くはずがないだろう」と心の中で思いながら、おじいさんからアイスクリームをもらえらることを期待していた。

家に行ってチャイムを押すと、妙な静けさだけが残った。私は何度も何度も押した。何だか胸騒ぎがしたので、あちこちを探し回ると、畑で人が倒れているのをみつけた。おじいさんであった。すぐに救急車を呼び、搬送してもらった。幸運にもおじいさんは軽度の熱中症であった。

このような経験から私は、回覧板は、ただ情報を伝えるだけではなく、人の安否を確かめ、つなぐものであると感じた。地元の回覧板の制度に心から感謝したい。
